



Title	近代英語の命令文の派生について
Author(s)	加藤, 正治
Citation	大阪外大英米研究. 1990, 17, p. 85-100
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99142
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近代英語の命令文の派生について

加 藤 正 治

0. はじめに

本稿では近代英語にみられる命令文の統語的派生について論ずる。近代英語においては、古い形式の命令文と現代英語にみられる命令文が混在し、現代に近づくにつれて次第に古い形式は姿を消してゆく。その変化の過程をとらえるためには規則・原則が変化したと考えるのが妥当であろう。現代英語の命令文の派生については Pollock (1989) において提案されている方式を基礎とする。近代英語については若干の修正を加えて考察を行なう。

1. 枠組み

句構造規則は Pollock (1989) のものを採用する。

- (1) CP → C TP

TP → NP TP'

TP' → T NegP

NegP → Neg AgrP

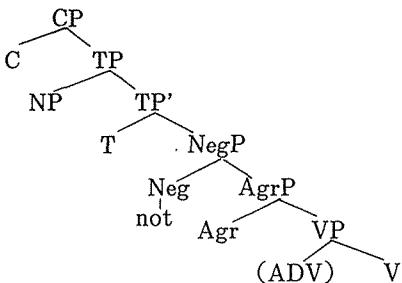
AgrP → Agr VP

VP → (Adv) V

Neg → not

樹形図に描けば次の(2)のようになる。

(2)



命令文の統語的派生については、代表的なものとして1) You will V ... という基底構造を設定し you will もしくは will のみを削除するものと、2) 命令文特有の句構造規則（例えば $S \rightarrow (NP) - V^2$ (Akmaijan, Steele & Wasow (1979))）を設定するものとがあった。いずれの方式を探るにしてもどのみち命令文は例外的なものとして扱うことになる。従って、問題はその例外性を文法内部のどの部分に持って行くかである。本稿では命令文の基底構造はできるかぎり平叙文に近いものを想定し、さらに削除規則はなるべく用いないようとするという方針に従い、次のように規定する。まず、二人称主語と命令文の共起に着目し、さらに、主語 you が随意的に生じるという点も考慮して、命令文は「Pro落とし (Pro-drop)」構造になっていると仮定する¹。即ち、明示的な主語 you が出現する場合には平叙文とほぼ同じ構造をとり、主語が出現しない場合には pro が主語になっていると仮定する。Pro 落としはイタリア語、スペイン語などにみられる現象で、人称代名詞主語が自由に出現したり消失したりするものである。

- (3) a. Io vengo 'I come'
 b. Vengo 'I come'

bの主語として想定される空範疇を pro と呼んでいる。この現象の説明として一般的に行なわれているものは、Pro 落とし言語は「強い Agr」を持ち、そうでない言語は「弱い Agr」を持つと仮定することである。強い Agr は pro を認可 (license) でき、他方弱い Agr はそれができないのである。認可については Rizzi (1986) のものが現在のところ妥当であると思われる。空

近代英語の命令文の派生について

範疇が空範疇として存在できるためには一定の条件を満足していなくてはならず、その条件を認可条件と呼び、それを満足させれば認可されていると考える。Rizzi (1986) では認可条件として次の二つを設定している。

(4) a. 適正統率 (PROは例外²)

b. 内容の復元

「適正統率」については次のとおりである。

(5) α が β を適正統率する必要十分条件は① α が主要部で β がその姉妹になっているか② α が β を束縛し、 α と β の間に β にとってのバリアが存在しないかのどちらかである。

「内容の復元」とはそれぞれの空範疇に含まれる ϕ 素性（具体的には数・人称・性）を復元することである。移動の結果できた痕跡はその束縛子（即ち移動させられた要素）により内容復元され、PROはコントロール理論により先行詞が決定され、その先行詞によって内容復元される。主語の pro は適切な Agr が内容復元できる。その方式としては、Agr は適正統率子として作用する ϕ 素性指定された強い Agr と、適正統率子として作用しない ϕ 素性指定されていない弱い Agr に分類されると考える。強い Agr は指定辞－主要部一致 (SPEC-Head Agreement) により主語の pro の内容復元ができるので、認可できる。(主語が語彙的名詞句ならば、Agr と主語の素性指定が一致するかどうかをチェックするだけとなろう。) 一方、弱い Agr は適正統率子ではなく、そのような素性指定されていないので pro が主語になった場合その内容復元ができない。従って pro を認可できず主語として pro をとれないことがわかる。弱い Agr は V に付加される接辞であるので、素性指定は何らかの方法で行われなければならない。それは語彙的主語との指定辞－主要部一致によって行なわれ、その後に V に接辞として付加されることになる。従って、先の仮定に従うと、英語のふつうの文は弱い Agr を持ち、命令文は強い Agr を持つということになる。即ち、命令文の例外的なふるまい方の原因を強い Agr の存在に求めることになる。Agr は（その強弱にかかわらず）通常 Tense と共に起する（ただし、ヨーロッパのポルトガル語には主語との一致

加 藤 正 治

を示す不定詞がある。Raposo (1987) 参照。) ので、必然的に時制文として扱われることになる。意味から考えて、時制は [−Past] ということになろう。命令文の構造は次のようになる³。

- (6) [cp [tp {^{pro}_{NP}} [r' [r − Past, Imp] [_{AgrP} S-Agr [_{VP} V ...]]]]]
(S-Agr は「強い Agr」を表わす)

2. Pollock (1989) による命令文の派生

命令文の派生について述べる前にまず Pollock (1989) の方式では平叙文をどのように派生するかを簡単にみてみよう。この方式の特色として次のもののがあげられる。

- (7) a. Tense と Agr を分離し、各々 TP, AgrP を形成すると考える。
b. Neg を主要部とする NegP を仮定する。
c. V移動 (Verb Movement) を想定し、Vが Agr → T (→ C) と上昇していく。
d. 空範疇の do, 即ち音韻素性を除いてdoと同じ素性を持つ空範疇を仮定する。

(7) a. bについては副詞との相対的な語順によって決められる。(7) c については現代英語では be と have を除いては観察されない。図式的にみると、

- (8) [cp [tp NP [r' T [_{AgrP} W-Agr [_{VP} V NP]]]]]
 ↑.....|↑.....|↑.....|
 ② ③ ①

(W-Agr は「弱い Agr」を表わす)

①の移動については、移動そのものは許容されるが、弱い Agr を主要部にもつ AgrP は V の θ役付与を阻止すると仮定されているので、θ理論により排除される。Be/have については θ役付与をしないと仮定し、存在の be 及び所有の have の後に生ずるNPに対しては所格要素 LOC (空の場合もある) が θ役付与をすると考えるので、θ理論の違反は生じない。従って何の支障もなく①の移動が可能である。②の移動については T を一種の量化詞 (Quantifier)

近代英語の命令文の派生について

とみなし、Vの痕跡を束縛しなくてはならないと仮定することにより、この移動を（従って①の移動も）実質的に義務的にしている。（尚、VをAgrを経由せずに一挙にTまで移動するとECP違反になるので必ずAgrを経由しなくてはならない。）従って①の移動はθ理論では許されず、他方②の移動が義務的であるのに伴って義務的になるという矛盾が生じる。これを解決するために(7) dの空範疇do（以下φと記す）を想定する。このφは語彙的なdoと同じくAgrの下に生成され、VP内のVの代用形となり、Vのθ役をコピーし、Tまで移動する。従って①の移動はそもそも行なわれないのでθ理論の違反は生じず、またTはAgrの位置に残る痕跡を束縛できるので矛盾は解決される。否定文ではNegPが存在することになるが、次のように必ずdoが生じ、φは許されない。

- (9) a. *John not left.
b. John did not leave.

この構造は次のようになる。

$$(10) [_{CP} [_{TP} John [_{T_i} [_{Agr_i} [_{V_i} \left\{ \begin{array}{l} do \\ \phi \end{array} \right\}] T] [_{NegP} not [_{AgrP} e_i [_{VP} leave]]]]]$$

ここでNegPは固有バリア(inherent barrier)であると仮定する。そのために一般に統率を阻止することになるが、固有バリアがLマークされる場合には統率を阻止しないと仮定されている。(10)のdoは語彙範疇なのでNegPをLマークするため、 T_i が e_i を統率するのを防げずECPを満足する。他方φは語彙範疇ではないのでNegPをLマークせず、 e_i はNegPによって統率を妨げられることになり、ECP違反となる。従ってNegPが存在すればφは生じず、否定文では必ずdoが現われることになる。

- 次にあるように一般にbeとdoは共起しない。
- (11) *John doesn't be happy.

この構造は次のようになる。

$$(12) [_{CP} [_{TP} John [_{T_i} [_{Agr_i} [_{V_i} do] Agr] T] [_{NegP} not [_{AgrP} e_i [_{VP} be happy]]]]]$$

形式上は先の(10)と同じであるので文法的な文になるはずであるが、実際は非文

加藤正治

である。Do は先述のとおり VP内の V の代用形になり θ役をコピーする。Be は θ役を持たないので do には θ役はコピーされず、そのような do の痕跡は T が束縛する変項としての資格がないと仮定し、そのためには非文になるとする。Do の代わりに ϕ が用いられても同様に非文となる。従って be の場合には V 移動が適用されねばならないことになる。

Pollock (1989) の考え方では、命令文は本質的には平叙文と同様に派生されるとしている。まず肯定命令文を考える。

- (13) a. (Do) sing !
b. (Do) be a good sport !

これらの構造は平叙文のそれとほぼ同じである（命令文においては T の中に Imp という要素が付加される）。

- (14) a. [CP [TP NP [τ— Past, Imp] [Aggr [{do} ϕ [VP sing]]]]]
b. [CP [TP NP [τ— Past, Imp] [Aggr [{do} ϕ [VP be a good sport]]]]]

a 文については平叙文と全く同じ派生で問題がない。b 文については平叙文と異なり do / ϕ と be が共起しているので、問題である。平叙文の場合には be に θ役がないので do / ϕ の痕跡は T に束縛される変項としての資格がないと考えたが、命令文では Imp があるためにその痕跡に変項としての資格が与えられると考え、do / ϕ の移動が可能になるようにしている。命令文では be / have であっても V 移動が適用されない。

- (15) a. *Have not finished your work when I come back.
b. *Be not silly.

（以上 Pollock (1989) より）

Pollock (1989) では、命令文的働きをもつフランス語の不定詞の例も考慮に入れて次の一般化を提案している。

- (16) 命令文的な力をもつ [-finite] な文においては Neg は V 移動を阻止する主要部とみなされる。

近代英語の命令文の派生について

(Pollock (1989) : (91))

命令文を [- finite] とみなして否定を含む構造を考えると, (15) a. b において *be/have* は *not* を越えて V 移動できないので, 正しく非文であるとされる。ところがこのような案を採用すると今度はふつうの否定命令文が派生できなくなる。

(17) a. Don't prepare.

b. Don't be silly.

これらの例では *do* が明らかに *not* を越えて移動しているので非文になるはずである。

(18) [CP [TP NP [τ - Past, Imp] [NegP not [AgrP do [VP {prepare}]]]]]]

この解決策として, Pollock (1989) はこの *do* を助動詞ではなく本動詞とみなし, 古い英語の「使役の *do*」の名残であるとする。即ち, 現代英語の *make* と同じように後に目的語 + 原形不定詞を従えるとみなすのである。*Not* は従って古い英語式に主動詞 *do* の後に付き, 肯定命令文と同じく ϕ が V 移動する⁴。

(19) [CP [TP NP [τ - Past, Imp] [AgrP ϕ [VP V+not
[CP [TP T [AgrP Agr [VP...]]]]]]]]

以上が Pollock (1989) で現代英語について述べられている事柄の概要である。次に近代英語の命令文に関してこの枠組を検討する。

3. 近代英語の命令文の分析

近代英語にみられる命令文の分類は次のようになろう。

(20) 肯定命令文⁵

- a. (You) V ...
- b. (You) be Pred ...
- c. V you ...

'Bring thou the master to the citadel;'

(Othello. II. i. 211)

加 藤 正 治

d. Be you Pred ...

‘Bee you my Orator.’

(Webster : *The White Devil* II. i. 21—22)

e. Do you V ...

‘and do you come with her.’

(Richardson : *Pamela*)

f. Do you be Pred ...

‘Sophy, do you be a good girl,’

(Fielding : *Tom Jones*)

(2) 否定命令文

a. V not ...

‘Sit not down here,’

(Bunyan : *The Pilgrim’s Progress*)

b. Be not Pred ...

‘be not very grave’

(Meredith : *The Egoist*)

c. V you not ...

‘Fear you not my part of the dialogue.’

(*Much Ado about Nothing* III. i. 31)

d. Be not you Pred ...

‘Be not you accessory.’

(Johnson : *Bartholomew Fair* II. i. 32)

e. Do not V ...

f. Do not be Pred ...

g. Do not you V ...

‘Don’t you take on, sir.’

(Stevenson : *Treasure Island*)

近代英語の命令文の派生について

h. Do not you be Pred ...

'Don't ye be nervous,'

(Hardy : *Tess of the D'Urbervilles*)

i. Not V ...

'Not looke toward the windore : '

(Johnson : *Volpone, or the Fox* II. i. 67-68)

j. V pronoun not ...

'forsake me not, dear Isabella ! '

(Walpole : *The Castle of Otranto*)

(20) a. b については Pollock (1989) と同様に派生でき、問題点はないところであろう。ただし、 ϕ を認めるか否かが後に問題となる。(20) c. d では一般動詞, be ともに主語 you の前に生じている。従っていわゆる主語 - 助動詞倒置 (Subject-AUX Inversion) の効果が生じているといえるが、Pollock (1989) ではこの効果は V を Agr, T を経由して C まで移動することによって得られる。このことは即ち、(少なくとも) このタイプの命令文では V 移動が生じているということを意味する。Pollock (1989) による現代英語の分析では、Agr が弱いので AgrP が V による θ 役付与を阻止する、ということで一般動詞の Agr, T への移動を不可能にしている。しかし本稿では命令文の Agr は強いと仮定するので、AgrP は θ 役付与を阻止しないことになり、V 移動が可能である。

(22) [CP [T_i [V_i Agr] T] [TP you [T_i e_i [AgrP e_i [VP e_i ...]]]]]

この派生は現代英語の命令文では許されないので、現代英語の Agr が近代英語の Agr ほどは強くないが、それでも pro を認可できる能力をもつと仮定しなければならない。この命令文の Agr の強弱の差は、Pollock (1989) も指摘しているように、二人称において動詞が単数・複数の区別をするか否かに依存していると思われる。即ち、動詞の活用に二人称単数・複数の区別があった頃の Agr はそれの消滅した現代英語の Agr よりも強かったと考えられる。従って現代英語、近代英語ともに命令文では Agr は pro を認可できるくらい強力

加 藤 正 治

であるが、二人称の数の区別できない分だけ現代英語の Agr のほうが弱く、 θ 役付与を阻止するということになる。このように V 移動が認められると、(20) a. b については ϕ を仮定する必要がなく素直に V が T の位置まで移動すると考えればよいことになる。

(20) e. f については、do が V 移動を受け(20) c. d と同じく C の位置まで移動し、いわゆる主語一助動詞倒置効果が現われている。派生は次のとおりである。

(23) [CP [T_i do; T] [TP you [T_j e_i [AgrP e_i [VP {V
be} ...]]]]]

Do は V の θ 役をコピーし θ 役付与を代行するので θ 理論の違反はない。Pollock (1989) のように T への V 移動を認めず「使役の do」を用いる分析も可能である。本稿では(20) c. d で T への V 移動を認めざるを得ないので Pollock (1989) の方式はとらない。

次に否定命令文について考察する。(21) a. b は not の前に動詞が生じている点が特徴的である。即ち、not を越えて T まで動詞が移動しているのである。動詞が Agr を経由して T まで移動するのは強い Agr を想定するので問題ないが、問題は not を主要部とする NegP の存在である。Pollock (1989) では(16) で述べたような一般化を仮定しているため、NegP は移動を阻止する働きをもつことになる。しかし実際には明らかに V は not の前へ移動しているので NegP は移動を阻止しないと考えねばならない。この矛盾を解決するために(16)の一般化が近代英語には存在しなかったと考えることは可能であるが、Pollock (1989) ではこれをフランス語の不定詞を含めた一般化であると考えているので、なくしてしまうわけにはいかないであろう。もう一つの案として、近代英語では NegP を全く認めず Neg は AgrP に付加するという方法が考えられる。

(24) [CP [TP NP [T_i T [AgrP Neg [AgrP Agr [...]]]]]]]

このように考えると Neg はもはや主要部ではないので V の移動を阻止することではなく、T (もしくは C) への移動が可能である。

(25) [CP [TP pro [T_i T [AgrP Neg [AgrP Agr [VP {V
be} ...]]]]]]]
↑ |↑

近代英語の命令文の派生について

(21) c. d は C への V 移動が適用されていると考えられるが、適用されない場合には You $\left\{ \begin{matrix} V \\ \text{be} \end{matrix} \right\}$ not ... という誤った形式が出てくるので義務的な適用を想定しなくてはならない。さらにこの両者は not の位置に関して好対照をなす。Cにおいては V が not を残して主語 you の前に移動しているのに対し、dにおいては be が not とともに主語の前に移動している。この現象は一般の疑問文においてもみられる。

(22) a. And could not you open it ? said Manfred.

(Walpole : *The Castle of Otranto*)

b. And do not you fear the fierce vengeance of my arm wreaked on your miserable head ?

(M. Shelley : *Frankenstein*)

c. Is not this a free country ?

(ibid.)

この場合、助動詞的要素と not が一つの構成素を成していることは異論のないところであろう。即ち、not が助動詞的要素に接語化 (cliticization) されているということである⁶。

一方、not は語彙的な一般動詞には接語化しないので、(21) cにおいて V のみが主語の前へ移動する。ただしここで問題になるのは、一般疑問文の場合には not を残して助動詞要素だけを主語の前へ移動することも可能であるが、命令文では必ず not は接語化され助動詞要素とともに移動される、という事実である。この点については解決案はない。

(23) e. f については (21) a. b と対照的で現代英語にふつうにみられる形式である。Neg は V 移動に対して障害にならないのであるから Pollock (1989) 式に Agr の下の do を仮定し、これに V 移動を適用すれば派生される。(21) g. h では主語 you の前に do not が生じているが、C への V 移動は認めざるを得ないのは先述のとおりであるので、Agr の下の do を T へ移動し、not を接語化し、T から C へさらに移動したものと分析できる。従って (21) e. f. g. h は次のような派生構造となる。

(27) $[_{CP} [_{C_i} [_{T_i} [_{Agr_i} do-not] C [_{TP} \{^{pro}_{you}\} e_i [_{AgrP} e [_{AgrP} e_i [_{VP...}]]]]]$

Cへの移動は You do not $\{^{V}_{be}\}$ … という誤った形式を生成させないようにするために義務的にしなくてはならない。(21) i は Ukaji (1978) によればそれほど頻繁に見られるものではないということである。命令文の基底構造を(6)であると仮定しているため、命令文は T を含み、T は量化詞なのでそれが束縛する変項が必要である。このパターンでは not V の語順から V 移動が生じておらず、従って変項になり得る痕跡がないことになる。これを解決する方法として、元来空範疇である Agr を利用してこれを T に束縛させるという方法が考えられる。しかし、T 自体にそもそも指標がないので、この束縛は束縛の一般条件を満たさず成立しないことになる。やはり何らかの動詞的要素を T へ移動し、その指標を T に浸透させて適正な束縛子にする必要がある。この動詞的要素としては Pollock (1989) の提案している ϕ が考えられる。基底構造は次のようにであろう。

(28) $[_{CP} [_{TP} Pro [_{T-Past, Imp} [_{AgrP} not [_{AgrP} \phi [_{VP...}]]]]]$

↑—————↓—————

従ってこれは(21) e の特殊な形式とみなすことができる。本稿では近代英語に ϕ を仮定しない立場をとるので、この分析は例外的な特殊なものということになる。そのために、それほど頻繁にみられない構文であるということになるのであろう。

最後の(21) j もかなり特殊なパターンである。目的語が代名詞で、その後に not が生じている。この not の位置については、もともとは V の直後にあり韻律上の理由で代名詞の後に移ったと分析できる。即ち、

(29) $[_{CP} [_{TP} pro [_{T-Past, Imp} [_{AgrP} not [_{AgrP} Agr [_{VP} V pronoun]]]]]$

↑—————↓—————↑—————

のような派生によって V not pronoun が生成され、韻律に関わる文体規則で not と pronoun が前後入れ換わると考えられる。従って本質的には(21) a と同様であるといえる。

近代英語の命令文の派生について

4. 残された問題とまとめ

以上のように近代英語の命令文は Pollock (1989) の枠組に若干の修正を加えて生成できるが、いくつかの問題点が未解決のままである。まず第一に、過剰生成とそれに関連する Cへの V 移動の問題がある。肯定命令文(20) a. b と c. d を比較すると、Cへの V 移動が適用されなければ a. b の形式になるし、適用されると c. d の形式になることが分かる。したがってこれらをみる限りは Cへの移動は随意的ということになる。しかし、(20) e. f では Cへの V 移動が適用されないと You do $\left\{ \begin{matrix} V \\ \text{be} \end{matrix} \right\} \dots$ という誤った形式が生成されるし、否定命令文(20) c. d 及び g. h においても同じく各々 You $\left\{ \begin{matrix} V \\ \text{be} \end{matrix} \right\}$ not ..., You do not $\left\{ \begin{matrix} V \\ \text{be} \end{matrix} \right\} \dots$ という誤った形式が出てきてしまう。従ってこれらの場合には Cへの V 移動は義務的でなくてはならない。本稿では扱わなかったが、Cへの V 移動に関する制約についての研究がなされればこの矛盾が解決される可能性が大きいにあると考えられる。次に、(21) i. j について、主語 you の出現しない形式しかみられないという点が問題となる。本稿では命令文の主語は you と pro とが自由に交替すると仮定しているので、これらのタイプでは必ず pro が選ばれるとする何らかの方策が必要である。三番目に、本論の中でも述べたことであるが、助動詞要素と notとの関係があげられる。即ち、一般疑問文の場合には not と助動詞はともに文頭へ移動してもよいし、not を残して助動詞要素のみ文頭へ移動してもよいが、命令文の場合には助動詞要素と not は必ず一緒に移動しなくてはならない、という点である。規則の点から述べれば、一般疑問文では not の接語化が随意的であるのに対し、命令文では義務的になっているということになろうが、この差を本項で仮定した構造に帰することは今のところ不可能である。

以上、近代英語の命令文をタイプ分けし、各々の派生について考察してきた。いくつかの問題点はあるが、Pollock (1989) を基礎として(1)二人称の単数・複数を区別できる強い Agr を仮定し、(2) Cへの V 移動を認め、(3) NegP は想定せず Neg を AgrP に付加する構造を仮定すればかなり無理なく記述できると思われる。

加 藤 正 治

[注]

1. 今井・中島・外池・福地・足立著『一步すすんだ英文法』参照。
2. PROは統率されてはいけない、というのが条件になる。
3. 否定命令文については後の節で述べる。
4. Agr の位置に \emptyset の代わりに do が生じてもよいはずで、その場合には do don't V ... という非文が出てきてしまう。この排除の方法については Pollock (1989) は言及していない。
5. 命令文の主語は you に代表させる。
6. さらに n't に縮約する過程が付け加わることもある。

※本文中の例文は荒木・宇賀治 (1984), Katoh (1981), Ukaji (1978) から引用しました。

近代英語の命令文の派生について

参考文献

- Akmajian, A., S. M. Steele, & T. Wasow. (1979) "The Category AUX in Universal Grammar," *Linguistic Inquiry* 10. 1-64.
- 荒木一雄・宇賀治正朋 (1984)『英語史 III A』東京:大修館
- Bolinger, D. (1967) "The Imperatives in English," *To Honor Roman Jakobson I* 335-362. The Hague : Mouton.
- . (1977) *Meaning and Form*. London : Longman.
- Borer, H. (1986) "I-Subjects," *Linguistic Inquiry* 17. 375-416.
- Chomsky, N. (1986) *Barriers*. Cambridge, Massachusetts : MIT Press.
- Culicover, P.W. (1976) *Syntax*. New York : Academic Press.
- Curme, G.O. (1931) *Syntax*. Boston : D.C. Heath and Company.
- Emonds, J.E. (1976) *A Transformational Approach to English Syntax : Root, Structure-Preserving, and Local Transformation*. New York : Academic Press.
- Hasegawa, K. (1965) "English Imperatives," *In Honor of Fumio Nakajima's 60th Birthday*. 20-28. Tokyo : Kenkyusha.
- 今井邦彦・中島平三 (1978)『文 II』東京:研究社
- 今井邦彦・中島平三・外池滋生・福地肇・足立公也 (1989)『一步すすんだ英文法』東京:大修館
- Jespersen, O. (1961) *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Part III London : George Allen & Unwin LTD.
- Katoh, M. (1981) "On Imperative Sentences : A Historical Study Based on Data from a Selection of Literary Works from England (1650-1900)." 『英文学研究』第59卷第1号
- Lightfoot, D. (1979) *Principles of Diachronic Syntax*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Pollock, J. -Y. (1989) "Verb Movement, Universal Grammar, and the

加 藤 正 治

- Structure of IP," *Linguistic Inquiry* 20. 365-424.
- Poutsma, H. (1926) *A Grammar of Late Modern English* Part II : The Parts of Speech. Section II. Groningen : P. Noordhoff.
- Raposo, E. (1987) "Case Theory and Infl-to-Comp : The Inflected Infinitive in European Portuguese," *Linguistic Inquiry* 18. 85-109.
- Rizzi, L. (1986) "Null Objects in Italian and the Theory of pro," *Linguistic Inquiry* 17. 467-538.
- Ukaji, M. (1978) *Imperative Sentences in Early Modern English*. Tokyo : Kaitakusha.